

聖書日課

みちのひかり

2023

7月

今月の聖句

「今日に至るまで生涯を通して
私の牧者であられた神よ」
創世記第48章15節



八王子キリスト教会

7月1日(土) 創世記 第29章

あなたは何ということをしたのですか。私があるあなたのところで働いたのは、ラケルのためではありませんか。なぜ私をだましたのですか。(25)

ヤコブは、叔父ラバンのもとを訪ね、その娘ラケルを慕い、結婚を希望します。ラバンは七年の労働の条件を出しますが、ヤコブにはラケルへの恋心ゆえ数日と思われました。待ちに待った婚礼の祝宴後、朝になってみると、一緒にいたのはラケルの姉レアでした。土地のしきたりなど、ラバンは理由を言いますが、要するにざる賢さではヤコブに負けず劣らずの叔父にだまされたのです。それに対し、ヤコブも持ち前のざる賢さで叔父に策略を仕掛けることになってゆきます。ベテルでの神との出会いの経験をしたヤコブでしたが、それで性格がすっかり変わったというわけではなかったのです。そうした混乱に加えて、ヤコブの思いはラケルにあるにもかかわらず神がレアを顧み胎を開かれたのものですから、家庭はより一層複雑になります。本章は今後の不穏な展開を予感させます。

神さまの救いの物語なのにどうしてこんな展開なのか、とも思えます。しかし、こうした人間の関わりは、私たちが普段、肌身に感じる世界と重なります。つまり、救いの物語は、どこかのきれいなおとぎの国で展開されているのではないのです。人間がだまし合う現実の中に忍び込み、万事を相働かせて益としてしまう神のご計画が動き続けています。

主よ、思うに任せない生活の中で、なお、あなたの救いが展開していることを信じます。

7月2日(日) 創世記 第30章

一方、神はラケルを忘れず心に留めておられた。神は彼女の願いを聞き入れ、その胎を開かれた。
(22)

ヤコブの二人の妻による夫の愛の争奪戦が展開されます。当時は一夫多妻が認められてはいるものの、《二人が結ばれて一体となる》わけで、三人ではやはり不安定なのです。

ラケルの言葉、「私に子どもをください。さもないと、私は死にます」は、二人の妻が妬みに燃えながら、子どもを多くもうける競争の激しさを物語ります。それに対するヤコブの「私が神に代わられるというのか」に、すべてを握り給うのは神だという信仰を読み取れます。

「恋なすび」は、意識を朦朧とさせる中毒を引き起こす植物で、未だに恐れられているようです。こうした激しい作用が膠着状態を打破するとラケルは考えたのでしょう。神は、まるで彼女の策略の裏をかくように、恋なすびを手放したレアの方に子どもを宿らせなさいます。その後、神はこのラケルをも心に留めておられ、ヨセフが生まれます。そして、創世記の後半、ヨセフの登場でもたらされる兄弟の不穏な関係を通し、波乱に満ちた物語となります。

人間の感情や計算が入り乱れますが、混乱にしか見えない一連の出来事を、神が見えないところで導かれます。創世記の大きなテーマ《摂理》が次第に現れてきています。

主よ、私の混乱にもかかわらず、あなたの導きの手が離れていないことを信じていることができますように。

7月3日(月) 創世記 第31章

すると神はその夜、夢の中でアラム人ラバンに現れて言われた。「ヤコブとは、事の良し悪しを論じないように注意しなさい。」(24)

増えていく羊や山羊などの家畜がどちらのものかが、前章から問題になります。ヤコブの取り分は黒みがかかった家畜だという取り決めのあと、叔父ラバンはそれらを隠してしまいます。それに対抗して、怪しげな仕方で自分の取り分となる色の家畜の繁殖に成功します。こうした対決で両者の亀裂が明らかになり、ヤコブは生まれ故郷に帰るよう神に促され、彼は叔父を欺くため、今は自分の妻となった叔父の娘二人と自分の財産を携えて夜逃げ同然で旅立ちます。

この時妻のラケルは、ラバン家の守り神(テラフィム)を黙って持ってきていました。ラバンは怒って追いかけます。神がラバンにヤコブのやり方の善し悪しを問い詰めるな、と言われますが、神にこう言われなければ流血の事態となったでしょう。ラバンは、とくに守り神が盗まれたと訴え探しますが、ラケルが上手く隠して見つけれられません。濡れ衣だと信じたヤコブは逆上してこれまでの不満を叔父にぶつけます。

だまし合い、偶像の持参、真偽を確かめぬままの怒り、損したというお互いの言い分…と、何だか複雑な思いになります。その中で、事の善し悪しが事態を導いているのではなく、貧しく愚かな人間を神が担い導く姿が明らかになってきています。

主よ、悪を責め合い立つ瀬を失う私たちを担ってくださっているのですね。感謝です。

7月4日(火) 創世記 第32章

あなたの名はもはやヤコブではなく、これから
はイスラエルと呼ばれる。あなたは神と闘い、
人々と闘って勝ったからだ。(29)

ヤコブが故郷に帰るときの一番の問題は、か
つてだました兄との関係でした。長子の権利も
長子が受け継ぐべき神の祝福も自分の物として
しまっていたので、兄の報復が怖くて仕方あり
ません。そこで知恵を尽くして備えます。まず、
家族と財産を二組に分け、不測の事態に対応し
ます。さらに自分の前に、自分から兄への贈り
物を三つの組に分けて進ませます。幾重もの贈
り物で、兄の敵意を和らげる作戦です。

それでも彼の不安は去りません。他のみんな
に川を渡らせ、自分一人手前の宿営に残った夜
に、一人の男(御使いでしょう)との組み討ちが始
まります。思いがけずヤコブは強く、その人は
勝てず、ヤコブの股関節に一撃を与えます。し
かし、「放してくれ。夜が明けてしまう」と叫
び声を上げるのはヤコブではなくその男の方
です。ヤコブの傷の痛みは彼をその男にしがみつ
かせる強い力となったのでしょうか。自分が、ど
うにもならない存在だと心底知らされたことこ
そが、必死に神を呼ばせるものとなりました。

彼は祝福されるものの、股関節が治ったわけ
ではありません。足を引きずりつつ兄に会いに
行きます。真実に自分を支えるのが、周到な作
戦や健康ではなく、本当にただ神の祝福だけだ
信じたのです。

主よ、ただあなたの祝福を、揺るぎなく信じ
る信仰の心を備えさせてください。

7月5日(水) 創世記 第33章

そこに祭壇を築き、それをエル・エロヘ・イスラエルと呼んだ。(20)

ヤコブは、兄に会う前から、もしもの時のために、最も大切な最愛の妻ラケルとその子どもヨセフを列の一番後ろに置きました。前に置かれたレアとその子たちがどんな思いでこれを受けとめていたのでしょうか。第 37 章での兄弟間の事件に至らせる嫉妬と憎悪が蓄積されます。

兄エサウは、思いがけずヤコブを赦して迎え、二人共に涙を流す感動の再会です。しかしながら、涙一つで解けるほど二人の関係は簡単なものではありません。ヤコブは、あとで兄に文句を言わせないように自分の贈り物を強いて受け取らせます。また、残りの旅路への兄の同行の申し出も使いの者の同行もやんわりと断ります。兄は、自分の住むセイルに弟を迎えるつもりでしたが、ヤコブはそこには行かずスコトに家を建てます。

ヤコブの本当の慰めは、兄との間の涙ではなく、神ご自身です。ヤコブの家の地所は、スコト(小屋)と呼ばれ、エル・エロヘ・イスラエルの神、エルと呼ぶ祭壇が立ちます。自分が建てるのは小屋であって、本当に建ててくださるの神である、ということでしょうか。決してほめられない紆余曲折の中で、信仰の父祖の銅像は建たず、むしろ確かな神への信仰が育っているのです。

主よ、涙を流す感動でも消えない、冷たいものがあります。それを携えて祈りに向かいます。

7月6日(木) 創世記 第34章

厄介なことをしてくれたものだ。お前たちは私を、この地に住むカナン人やペリジ人の憎まれ者にしてしまった。(30)

カナンに住むヒビ人のシェケムは、ヤコブの娘の一人**ディナ**を辱めましたが、彼はなお彼女を慕って結婚を願います。彼の父ハモルは民の首長でしたので、ヤコブを訪ね正式に結婚を申し出ます。

ディナの兄弟たちは受け入れられず、周到に報復を考えます。結婚の条件に、ヒビ人の男子全員に割礼を求めます。割礼を施した傷の痛む彼らに攻撃を仕掛け、ディナを取り戻します。そればかりでなく、民を殺し財産も人身も略奪します。この事態を聞いた父ヤコブは「厄介なことをしてくれたものだ。お前たちは私を、この地に住むカナン人やペリジ人の憎まれ者にしてしまった。こちらはごく僅かなのだから、向こうが集まって攻撃して来たら、私も家族も滅ぼされてしまうだろう」と言います。

ヤコブの子どもたちは、自分たちが受けた傷よりも、もっと深く大きく相手を傷つけます。怒りが止まらなくなったのでしょうか。自分たちの行き過ぎた正義にも、報復がさらなる報復を生むことにも、思いが及ばなくなっています。それにもかかわらず、約束の地でのこの一族の生活は始まり、続いていきます。そのようにして、自分たちを支えるのは〈恵みの契約を施した神〉であることを知らされます。

主よ、報復の先には何も答えなどないことをよく知ることができますように。

7月7日(金) 創世記 第35章

彼は…その場所をエル・ベテルと名付けた。兄の前から逃れて行ったとき、神がそこでヤコブに自らを現されたからである。(7)

「エル・ベテル」(7)は《ベテルの神》の意味です。ベテルは、かつて兄から逃げ出したヤコブが夢枕に天のはしごを見たあの場所で、そこにもう一度戻るようにと神は示されます。そこで知った神が、ヤコブの神であり、イスラエルの神であると語られています。その神とは、逃亡を余儀なくされる者になお恵みを施し「決してあなたを見捨てない」(28:15)と仰せの神です。

前章で生じたその土地の人々の憎しみを買う困った事態は、なお解消しません。そうした事態のただ中で、彼らは異国の神々と装飾品をテレビンの木の下に埋めます。それは、主なる神へのひとすじの信仰を表します。ベテルに現れてくださった恵みの神への集中です。その信仰のとおり、近隣の人々が憎しみによって彼らを追うことはありませんでした。聖書が語るのは神の恵みが一族を守ったということであって、兄弟たちの残酷で過剰な報復を是認しているわけではありません。滅ぼされるはずの自分たちが、ただ恵みのゆえに赦されているのです。

愛妻ラケルが二人目の子どもの出産で亡くなります。ヤコブの後の人生をゆがめるほどの悲しみです。けれども、その悲しみもまた恵みを約束してくださった神が支えておられることをやがて知るようになります。

主よ、約束に忠実であってくださるあなたを深く深く知ることができますように。

7月8日(土) 創世記 第36章

エサウは、妻、息子と娘、家のすべての者…カナンの地で蓄えたすべての財産を携え、弟ヤコブから離れてほかの地へと赴いた。(6)

前章のイサクの葬りの場面に、エサウが改めて登場します。続くこの章は長い長いエサウの系図の記述です。この章の存在は、神がエサウをお忘れでないことを示します。たしかに神が選んだのは次男ヤコブでしたが、他は選ばれていないのだと聖書は語りません。私たちが選り好みし、選ばない方を必要以上に低くしたりするのは異なります。神はエサウもまたお覚えなのです。

かつて弟を殺したいと思ったほどの兄は、思い返せば、33章の弟との和解においては高潔ですらありました。彼の憎しみは和らぎ、ここでは共に父を葬り、そしてむしろ兄が平和裏に山地に赴き、弟との不要なトラブルを避けます。むしろ、好戦的なのはヤコブの子どもたち(34章)の方です。選ばれた者は、恵みによって支えられているに過ぎないのです。

こうした聖書の兄エサウの扱い方でわかるのは〈神の救いの広さ〉です。イスラエルの選びは確かな救いの道ではありますが、それは他を捨て去るようなものではありません。むしろ、神はイスラエルから始める救いを広げることによって、すべてに救いを及ばせなさいます。

主よ、選ばれつつ謙遜に生きることができますように。違う立場の人、異なる信仰の人とも、穏やかに生きることができますように。

7月9日(日) 創世記 第37章

兄弟はヨセフを妬んだが、父はこのことを心に留めた。(11)

ヨセフ物語が始まります。彼は、他の兄弟にまさって父の寵愛を一手に受けて育ちました。それだけで妬まれそうなものですが、加えて他の兄弟の悪い噂の父への密告や、他の兄弟が着られなかった長袖の上着を着ていたことは、より一層兄弟の妬みを厳しいものにします。

おまけに、自分が見た二つの夢の話（兄たちの麦の束が自分の束に向けてひれ伏す夢と日[父]と月[母]と十一の星(兄弟)が自分の星にひれ伏す夢）をします。この夢は神がヤコブ一家に準備した物語を象徴するものです。父ヤコブは、これをとがめる一方で「このことを心に留めた」とも書かれます。ヨセフのあまりの話に何かを感じ取ったのでしよう。彼が予感したとおり、神は摂理をもってこの家族を導かれます。

けれども物語は一気に暗転し、父の予感も吹き飛びます。兄弟たちの妬みと憎しみがヨセフを殺しかけます。長男ルベンによって殺害は免れたものの、エジプトへの隊商に奴隷として売り飛ばされ、父には獣に殺されたと虚偽の報告がなされます。忌々しいばかりのヨセフの夢を、兄たちは踏みにじったつもりですが、実際にその夢はヨセフの夢ではなく神の夢（摂理）であって、それゆえに潰えません。

主よ、あなたが与えてくださる夢は潰えません。そのことを忘れてしまうときにも、あなたがあなたの夢を前に進めていてください。

7月10日(月) 創世記 第38章

「彼女のほうが私よりも正しい。息子のシェラに彼女を与えなかったからだ。」ユダは再びタマルを知ることはなかった。(26)

ヨセフ物語の中に、いきなりユダとその子孫の物語が差し挟まれます。著名な旧約学者も言いますが、前後のヨセフ物語との関わりは、よくわかりません。

このユダの子孫が残されていく物語で、危機に瀕するのはユダの息子の嫁として迎えたタマルという女性です。当時、兄弟が死んだ場合、残った兄弟がその妻を迎える、レビラート婚という制度がありました。タマルが結婚した長男が死に、次に迎えた次男も死にます。ユダは怖くなり、三男との結婚は口約束だけで実現しませんでした。

それを知ったタマルは遊女に変装し義理の父ユダと関係し子どもを宿します。妊娠がわかったとき、タマルは不貞の嫌疑から殺されかけますが、関係を持ったときの証拠の印章と杖で、自分に対する不当な扱いを訴えます。ユダはそれに対して「彼女の方が私よりも正しい」と言います。この道ならぬやり方について、聖書は彼女を責めず、立場の弱い彼女がこうして一族に受け入れられていったことを淡々と記します。気の重くなる嫌な話の中で、神は着実に救いの歴史を進めておられました。マタイによる福音書が記す系図に、タマルは登場します(マタイ 1:3)。

主よ、人間の弱さも醜さもまるごと受けとめ給う恵みに、信仰の目を覚まさせてください。

7月11日(火) 創世記 第39章

主がヨセフと共におられたからである。主は、彼のなす事が順調に運ぶようにされた。(23)

「主が彼と共におられ…事は順調に」という言葉が、2節、3節、21節、23節と繰り返してできます。そう語られるものの、エジプトでのヨセフの歩みは、「順調」よりもむしろ波瀾万丈で、せつかくの成功が、ポティファルの妻の偽証によって台無しになり、かつて投げ込まれた前の穴蔵にも似た牢屋に逆戻りです。

「神さま、どうして私の人生はいつもこうなのですか」とも言えそうです。けれども、彼の小言は一言も書かれません。腐ることなく、素直に神を信じて生き、神が今日、お与えくださる小さな実りを感謝して受けとめたのでしょう。そのようにして、主が共におられることが、ヨセフの仕事の結果にも次第に明らかさを増して現れ、ヨセフ自身にも、まわりの人々にもそれがわかるようになります。

そうすると、ヨセフにとっての《順調さ》とは、万事思い通りに事が進むことではありません。それは、様々なことがありつつも、なお神が共におられることを信じ、目の前の小さな事の中に見いだす《順調さ》でした。こうした小さな順調を感謝して受けとめることが、やがて彼の人生の背骨となり、一国を救うほどの流れになります。

主よ、やせ我慢でも何でもなく、順調に今日が運んでいることを深く信じさせてください。感謝から始めます。

7月12日(水) 創世記 第40章

ところが、献酌官長はヨセフのことを思い出さず、忘れてしまった。(23)

ヨセフの牢屋での生活がなお続きます。王の献酌官と料理長が過ちを犯して、ヨセフのいた牢屋に入って来ます。この二人の見た夢を、ヨセフが解きます。彼の夢解きのとおり、献酌官は嫌疑が晴れ釈放され、料理長は処刑されてしまいます。

ヨセフは、献酌官に自分が無実であることを王に伝えるように願ってありましたが、こともあろうに献酌官は釈放の喜びの大きさをゆえでしょうか、ヨセフの願いをすっかり忘れてしまいます。

これまでのヨセフの歩みを切り開いたのは、彼の忠実さだとも言えます。そこからすると、彼がどんなに牢屋で忠実に振る舞おうとも、肝心の献酌官が忘れてしまっているのですから、今回はどうにもなりません。

けれども、こうしてヨセフの手が及ばないところでこそ、神が事を進められることが明らかになってゆきます。前章で繰り返された《主が共におられた》という言葉は、本章で消えますが、神は隠れたところで働いておられます。そして、時を捕らえて事を動かさなさいます。そうすると、献酌官が忘れることすらも、神はご自身のご計画の中で有効にお用いになったわけです。

主よ、努力や手立てが無駄に見えるときにも、なお神が導いておられることを信じます。

7月13日(木) 創世記 第41章

その時、献酌官長がファラオに申し出た。「私は、今日になって自分の過ちを思い出しました。(9)

エジプトの牢屋にいるヨセフの身柄の救出、ヨセフの宰相への出世、飢饉に追い立てられて生じる兄弟との再会、一族の救出とこれまでの困難が解決に向けて一気に動き始めます。壮大な救いの物語です。それが献酌官が牢屋でのヨセフとの約束を、夢で悩むファラオの姿によって、脳裏にはっと思い起こすという、かすかなきっかけから展開するというのは、とても興味深いものです。とは言え、神の御業は偶然のいたずらによって、結果がどうなるかが全く変わるといようなあやふやなものではありません。神は「これからなさろうとしていること」(25)をお持ちです。壮大な神の物語には、仰々しい表紙などは付いておらず、誰にでもある全く日常の〈忘れることと思出す〉ことから、すべてをつなぐように始まっています。神の御業は、大きくて、細やかで、そして確かです。

神は私たちの代わり映えのしない日常の中で働いておられます。何がどう関係しているかなどという、私たちの詮索は及ばないほど、深く静かな神の導きです。私たちは、あとでふり返り、ああそうだったのかと思うほかありません。それでも、今日私たちには、すべてを共に働かせて益としてくださる摂理の神を信じることは許されています。

主よ、日常の過ちすら摂理の導きにお用いになるあなたを信じます。

7月14日(金) 創世記 第42章

ああ、私たちは弟のことで罰を受けているのだ。弟が私たちに助けを求めたとき、その苦しみをしながら、聞こうとしなかった。(21)

ヨセフと兄たちが再会します。ヨセフは兄を知りますが兄たちには分かりません。回し者の嫌疑で投獄され、「弟のことで罰を受けている」と思うのです。これはヨセフ事件以後の彼らが、何か事が起こるたびにそれを罰と捉えるという、彼らの人生の態度を表しているでしょう。こうした感覚は、私たちにも生じ得ますが、このヨセフと兄弟たちの物語は、罰に怯える人生に光を与えます。

ヨセフは、自分に聞き取られていることを知らないままに兄たちがとても正直な胸の内を語るのを聞くことになります。そして、気づかれないように遠ざかって泣きます。この涙は、和解への道筋と考えてもよいでしょう。かつての自分に対する兄たちの振る舞いは、まるで石ころでも扱うようなものでした。けれども、それが兄たちの人生の中にどれほど深い傷を刻み込んでいるかが、よくわかったのです。それで、兄たちを赦す道筋に立ちます。

当初、兄たちはヨセフへ仕打ちをして、清々した気分だったかも知れませんが、一抹の罪責が心の澱^{おろ}として残ったのです。罪による傷は、受けた側ばかりでなく、傷付けた側にも残るのです。それに気づくことで、和解の準備がなされています。

主よ、自分の罪責に向き合う敏感さと勇気を与え、新しい歩みを歩ませてください。

7月15日(土) 創世記 第43章

どうか、全能の神がその人の前でお前たちを憐れみ、もう一人の兄弟とベニヤミンとを返してくださるように。(14)

ヨセフと兄弟たちの再会は、長い物語で一段と深められます。本章では、末の弟でヨセフと同じ母から生まれたベニヤミンがエジプトに行く次第が語られます。

ヤコブは言われるままに末弟をエジプトにやるわけにはいきません。自分の息子のうち、ヨセフはすでに死んだと思っていますし、シメオンも人質としてエジプトに取られたままです。彼の家族に投げ込まれた傷が、これ以上深くないように、自分で必死に守っています。けれども、その守りが及ばないほどに飢饉は激しく、それに追い立てられて「どうか、全能の神がその人の前でお前たちを憐れみ、もう一人の兄弟とベニヤミンとを返してくださるように。子どもを失わなければならないのなら、失うまでだ」(14)と言います。子どもを全能の神に委ねるのですが、それは〈失うかどうかすらさえも〉委ねるということとして深められています。ずいぶん厳しく、ある意味ではひどいという感情すら起こりえます。けれども、よくよく考えると、本当は子どもは自分の手の及ばない存在です。人生の傷に怯えるヤコブが描くよりも、はるかに神はダイナミックにこの家族への救いの物語を書いてゆかれます。

主よ、私たちの手が及ばないと思う事々の中であなたが働いておられることを信じます。

7月16日(日) 創世記 第44章

どうか僕をこの子の代わりに、ご主人様の僕としてここにとどめ置き、この子は兄弟と一緒に上らせてください。(33)

ヨセフが兄弟の持ち物に自分の宝物の杯をわざと忍び込ませ、一芝居打ちます。こうした中でユダが、ヨセフを失ってからの家族がどうであったかを語りつつ、ベニヤミンを父の元に戻すように嘆願します。私たちの心を打つ命がけの嘆願です。

そこに現れているのは、自分たちの罪がどんなに父を、そして家族を苦しめてきたかです。そうして、ユダは自分がその苦しみと悲しみを身代わりに負わねばならないのならば、自分が負うと語ります。自分たちの罪の足取りの先には悲しみしかないことを深く知り、もうその苦しみを二度と繰り返したくはない、と決意しているのです。

こんなに焦らすヨセフは、意地悪にも見えません。一方、ヨセフが焦らすことで、兄弟は自分たちの罪とそれが家族に刻み込んだ傷について吐露することになります。ヨセフの意地悪以上の意味があるのです。罪の悲しみの中で家族は立ち尽くしたのです。だからこそ、その罪に深く気づくところでこそ、物語は深く確かに進みはじめるということです。この身代わりを申し出るユダの子孫から、身代わりに十字架におかかりになった主イエスがお生まれになりました。

主よ、向き合うべきところに向き合わせてくださり、恵みを深く知らせてください。

7月17日(月) 創世記 第45章

命を救うために、神が私をあなたがたより先にお遣わしになったのです。(5)

長いヨセフ物語が一つの結論に至ります。それは、創世記が《混沌にも神の霊の支配がある》と語り始めていたものと重なります。見かけ上、神の支配がどこにあるかと思わせるような現実の中で、その現実を用い、結び合わせ、ご自身の救いへとつなげてくださいます。

自分を抑えきれなくなるほどのヨセフの感動はユダの嘆願に対するもので、単なる懐かしさを超えています。憎悪によって混沌とした兄弟の心の中にまで、神の霊の支配が及んでいることを知った感動と言ってよいでしょう。

ヨセフは、エジプトに来ることになった自らの歩みが、「命を救うために、神が私をあなたがたより先にお遣わしになった」ものだと言います。そのようにしてエジプトで始まった彼の歩みは、「神が私をファラオの父、宮廷全体の主、エジプト全土を治める者とされました」(8)と言うほどです。こうして、神の支配は大国エジプトにまで及ぶと語られます。

目に見えて明らかとは言えない神の支配は、しかし兄弟が抱く憎しみにも、そしてエジプトという大国の中にも及んでいるものであることがこの様に語られ、神の支配は深くて広いものだと信じることへと私たちを招いています。

主よ、重苦しい現実の中で、なおあなたの全能と摂理の支配を信じさせてください。

7月18日(火) 創世記 第46章

これでもう死んでもよい。お前がまだ生きていて、お前の顔を見ることができたのだから。(30)

ヤコブがまたの名「イスラエル」と呼ばれることで、これからエジプトへ下る歩みが偶然ではなく、神に導かれる民イスラエルの歩みであることが示されます。加えて、出立時にベエル・シェバで祈ります。この地には、アブラハムへの神の誓いのしるしの井戸があります。さらに神もヤコブに幻の中で、エジプト行きが約束の地を与え給う神の導きの中にあることを示されます。「イスラエルよ、エジプトへ行け」と神が言われるのです。

エジプト到着時、イスラエル(ヤコブ)一行のヨセフとの再会はユダが先導します。ユダの嘆願がエジプトへの道を開くことになったからでしょう。さらには、ユダはかつてヨセフが兄弟たちに殺されかけたとき、殺すよりもエジプトに売ろうと提案した本人です。ヨセフ殺害を阻止するためかどうかは定かではありませんが、あのユダの提案からエジプトへの一つの流れが動き始めていたのです。

イスラエルはヨセフと再会し「もう死んでもよい」と言います。ヨセフが死んだと思われたことが父の人生にどれほど重苦しい事だったかを思います。愛する息子との再会こそが父の重荷を解きます。こうして深く喜びを取り戻す結論を神は準備してくださっていました。

主よ、信仰の父祖に励まされ、あなたがこの上ない幸いを準備してくださると信じます。

7月19日(水) 創世記 第47章

私の生きた年月は短く、労苦に満ち、先祖たちが異国の地に身を寄せて生きた年月には及びません。(9)

ヨセフの兄弟たち、また父ヤコブがファラオと会見する様子が記されます。兄弟たちは自分たちが羊飼いだと言っているとファラオに語ります。前章ですでに羊飼いはエジプト人が嫌う職業だと言われていたので、ヤコブの一族はエジプトに身を寄せはするものの、定住はしないという筋を語っています。

また、ヤコブとファラオの会見で、ヤコブは「異国の地に身を寄せた」と言います。その年月が百三十年と言われていたから、カナンを含め、彼の人生すべてが、いわば寄る辺なき異国感に満ちたものであったことを物語ります。それにもかかわらず、彼はファラオを二度にわたって祝福します。二つの民のあり方が如実に表れます。エジプトは自分の豊かさによって生きる国です。一方、イスラエルは自分の豊かさに限界があるだけに神によって生かされます。イスラエルが現に持つものはファラオに及ばずわずかであっても、源泉を神に持つゆえにファラオよりも豊かなのです。苦悩も、寄る辺なさも、神の祝福のうちに置かれています。ヨセフは見事な政策でエジプトを確かな国にしますが、それでもヤコブは自分の亡骸を埋めるべきは、永遠の神との誓い(21:33)の地カナンだと言います。神の民は神を源泉とします。

主よ、この世を異国とし、あなたをこそ故郷として生きることができるよう。

7月20日(木) 創世記 第48章

今日に至るまで

生涯を通して私の牧者であられた神よ(15)

ヤコブは、死に際してヨセフの子どものマナセとエフライムを、イスラエルの祝福を直接受け継ぐ者とするため自分自身の子とします。そして、このヨセフの二人の息子を祝福するときになって、右の手を次男のエフライムに、左の手を長男のマナセに置きます。

ヨセフは、父ヤコブが目がかすんでしまっていたためと思ったのでしょう、それが間違いだと手を置き直させようとはしますが、それに対しヤコブは拒んで「弟のほうが大きな民になる」と言います。これは、ヤコブ自身が視力の弱った父イサクをだまして祝福を受けたときと、とても似ています。ここでヤコブも視力が弱っていますが、しかし間違えているのではなく、「分かっている。息子よ、分かっている」と、よく分かった上でそうしていると言います。彼の人生の最後にいたって、祝福は自分がだまして得たものではなく、牧者であられる神の確かで恵み深い導きの中で注がれるものであったと知ったのです。「分かっている」とは、牧者であられる神の恵みが、小さき者へ、低き者へ注がれ、導かれ養われることが、今やよく分かったということでしょう。

主よ、小さき私にこそ、低き私にこそ恵みが注がれることがよく分かりますように。あなたに養われ、導かれる羊としてください。

7月21日(金) 創世記 第49章

これらすべてがイスラエルの十二部族である。
これが、彼らの父が語り、祝福した言葉である。
(28)

ヤコブは自分の子どもたちの後の日に起こることを告げます。それらは、いわゆる祝福とうよりも、その個々の性質を語るようなものでもあります。たとえば、長男ルベンについては、父の寝台に上った(参 35:22)とその奔放さを語ります。シメオンとレビは、行き過ぎた報復でヤコブ家をその地に住みにくくしてしまった(参 34:25)ことが振り返られています。そしてユダはヨセフとの和解に一役買ったことが思い起こされ、やがての王権について言われます。

このように、ヤコブの言葉は息子たちの人生の失敗を思い起こすものでもあります。創世記はそれらの言葉全体を「父は、彼らそれぞれにふさわしい祝福を持って祝福した」と語り、「これらすべてがイスラエルの十二部族である」と語ります。思い起こしておくべきは、結局、息子たちは誰も失われず、今、ヤコブの前にあることです。空中分解しそうないざこざの中で、神ご自身が一つに結び合わせられました。それを改めてイスラエル、神の民と呼んでいるのです。

ヤコブが葬りを願うのは、アブラハムが約束の地で初めて購入した土地である墓所でした。世界にいたる神の祝福は、カナン之地から始まり、今もこの地上に着実に動き続けています。

主よ、問題ある私がお、あなたの祝福の中に置かれている幸いを感謝いたします。

7月22日(土) 創世記 第50章

ヨセフは言った。「心配することはありません。私が神に代わることができましようか。」(19)

ヤコブの葬りの願いを受けたヨセフは、その言葉の通り、エジプトから荘厳な葬列でカナンの地に行き、葬儀もまた荘厳なものが営まれました。このようにして示されているのは、神の民と約束の地の結びつきです。創世記の最後でこう示す行程表のとおり、やがてエジプトからイスラエルの民自体がこの地に帰ってくるようになります。

ヤコブが亡くなった後、ヨセフからの仕返しを恐れる兄たちの姿には、罪責の深さが窺えます。彼らはヨセフの心一つで赦されもし報復もされると思っているのです。つまり、自分たちの運命を握るのはヨセフだと思っています。そんな彼らにヨセフは「私が神に代わることができましようか」と答えます。兄たちの問題は、自分たちを結ぶのは父の存在であり、人間模様でどうにでも転ぶと思っているところです。神の恵みだと大胆に信じることができないところです。

信ずべきは、企てた悪すら多くの人の救いと変えてくださる神の恵みの確かさです(20)。何度もこれに立ち返らねばなりません。ヨセフは、罪責にさいなまれる兄たちを慰め、優しく語りかけています。こうした慰めの言葉が、神の民を保ちます。

主よ、あなたの慰めの言葉と、それを聴き取る信仰を私に与えてください。

7月23日(日) 出エジプト記 第1章

助産婦たちは神を畏れていたため、エジプトの王が命じたとおりにせず、生まれた男の子を生かしておいた。(17)

出エジプト記はその名前のとおり、ヨセフ時代にエジプトにやってきたイスラエルの人々が、そこを出て神が約束してくださったカナンに帰る物語です。

ヨセフのことを知らない王が登場します。イスラエルの人々は増えて、エジプトの国を脅かすほどになっています。こうした移民問題は、今も同じ姿があり、国の脅威として受けとめられます。エジプトの人々は知恵を結集し対応します。そこでの知恵は、いわゆる「自国第一主義」です。イスラエルの人々を虐げ、国内で危険な勢力となるのを阻止しようとしませんが事態は逆に動きます。王はさらに直接的に助産婦たちに生まれる男の子を殺せと言います。

それに対し「助産婦たちは神を畏れていた」と言われています(17,20)。ここが大切です。ヘブライ人であった助産婦ではありますが、彼女たちは民族の優位を競ったのではなく、神を畏れたのです。それは命への慈しみです。神から離れた人間の知恵は、自己中心的に命の尊厳さえ乗り越える危険を持ちます。しかしながら、殺戮を嫌悪する人間の心は厳然と存在します。この命の尊厳の感覚は、人が有する神の知恵と言ってもよいものです。王であっても命を自由に扱うことを神はお許しにはならないのです。

主よ、人間の中に刻み込まれた命を慈しむ心を大きくしてください。

7月24日(月) 出エジプト記 第2章

神はイスラエルの人々を顧み、御心に留められた。(25)

これから約束の地の入り口までイスラエルを導くモーセが登場します。生まれたばかりのモーセは愛らしく、なんとしてもその命が守られるようにと考え、川に浮かべた籠に隠します。それを水浴びに来たファラオの娘がを見つけ、やはり殺すことなどできず、水の中から引き上げられファラオの宮廷で育つようになります。モーセとは、「引き出す」という意味で、彼が川から引き出されたこととイスラエルをエジプトから引き出すことの二重の意味があります。ファラオの殺せという命令は、自分の娘にすら届きません。

モーセは育ち、苦役に服している同胞を救うために、同胞を打っていたエジプト人を殺します。彼なりの真剣な救済です。しかし真剣な救済が同胞に理解されないのです。翌日、同胞ヘブライ人同士の喧嘩の仲裁に入ったところ、「殺人者」となじられ、罪が知られていることを恐れて遠くミデヤンに身を隠します。

彼が自己の使命と感じたヘブライ人救出は、思い詰めた彼の正義感やその方法によるのではなく、イスラエルを御心に留められる神(25)によります。彼が身を隠したミデヤンでの時間は、救いは自分の力や方法ではなく、神によってなされることを深く知るためのものです。

主よ、思い詰め信じ込んだ正義感を主に委ね、本当に正しく生きられますように。

7月25日(火) 出エジプト記 第3章

イスラエルの人々に言いなさい。「『私はいる』という方が、私をあなたがたに遣わされたのだと。」(14)

ミデヤンからシナイ半島の奥にある山ホレブに来たところで、不思議に燃える柴の中からモーセは自分の名が呼びかけられるのを聞きます。彼に語りかけたのは、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」(6)です。エジプトでのイスラエル人の苦悩の呻きをずっと聞き続けていた神が、彼らを救うためにモーセに呼びかけたのです。「私はあなたと共にいる。これがあなたを遣わすしるしである」と神ご自身からこの上ない言葉をいただきます。ところが、モーセは慎重、もっと言うとな臆病です。

モーセは、イスラエルの人々から神の名を問われたときに何と答えるかと食い下がります。名とはその対象を把握し付けるものです。そうすると、至高者である神は把握できず、神の名は誰も付けることができません。だから神ご自身が「私はいる、という者である」(14)と言われます。

英訳の I am who I am は、原語の並びを反映しています。それにしても謎めいた名です。存在としての《实在》や、臨在としての《共にいる》という理解があります。「私がいるのだ、確かにいるのだ」と訳す人もあります。たしかに、民の度重なる不信仰や疑いでも消され得ない神の臨在が民を支えるようになります。

主よ、その名のとおり、あなたがおられないところがないことを信じます。

7月26日(水) 出エジプト記 第4章

私はあなたの口と共に、また、彼の口と共にあって、あなたがなすべきことを教える。(15)

モーセは神からの召命をなかなか受けとめようとしません。けれども、神は彼の使命遂行の支えを一つ一つ丁寧に伝えなさいます。

まず、しるしを行う力です。神はエジプトの人々が、しるしを行ってもそう簡単には信じないことをはじめからご存じです。ですから、彼らが信じないときに、重ねて奇跡を行うことをお約束くださいます。そうすると、しるしの本当の内容は、個々の超自然的なことと言うよりも、神がいつも共におられることなのです。

そして、もう一つモーセの使命遂行を支えるのは言葉です。彼は自分が雄弁ではないと食ひ下がりますが、それは神には問題ではありません。語るのはモーセではなく神だからです。雄弁は時におしゃべりになりすぎ、神の言葉の邪魔になります。そして、言葉のためには、モーセの兄アロンがいると言われます。アロンは、言葉の人だったようです。そうして「あなたの口と共に、また、彼の口と共に」と言われます。神の言葉はモーセの独唱ではなく、兄アロンとの二重唱です。そうして語られる言葉は、さらにはイスラエル全員が喜んで受けとめ語るようになるべき合唱とも言えます。

主よ、あなたの言葉をこそ、高く響かせてください。共々にその喜びを語っていることができますように。

7月27日(木) 出エジプト記 第5章

「この怠け者が。お前たちは怠け者なのだ。だから、主にいけにえを献げに行きたいなど言うのだ。」(17)

ファラオとの対決が始まります。ファラオは「主など知らぬ」と言います。王たる自分が知るかどうかは彼の価値判断です。しかし逆に主は全知で全能です。すべてを知るものこそ、まことの王です。

モーセらとファラオとの対決は一筋縄ではいきません。ある期間の荒野での祭り(礼拝)を願い出ますが、この礼拝は労働時間の損失としてしか受けとめられません。モーセの申し出で事態は逆に動き、レンガを作る他に、それを焼くわらを集めることまで、イスラエル人たちの労働とされてしまう始末です。

イスラエルの人々は礼拝を軽んじるファラオの態度に憤るよりも、自分たちの立場が悪くなったと、アロンとモーセに訴えるばかりです。それを見ると、礼拝はなくて済むならそれでよいような人生の付属物というファラオの理解がイスラエルを浸食しています。彼らは、順風が幸せを運ぶと信じているだけです。そうするとひたすら風向きに怯えるだけになります。

こうしたモーセすら困惑する逆風の中で、人を支えるのは風すらお造りになる神ご自身だ、ということが語られ始めています。

主よ、私を生かすのはただあなたです。礼拝によって、それを深く味わわせてください。

7月28日(金) 出エジプト記 第6章

私はあなたがたを私の民とし、私はあなたがたの神となる。あなたがたは、私が主、あなたがたの神…であることを知るようになる。(7)

ファラオどころかイスラエルの民すら、主のなさることに心を閉ざしてしまい、困惑するモーセに対して、主は召命の時のようにもうひとたび彼にご自身をあらわされます。逆風の中でも、「力強い手」と「伸ばした腕」があることを示されます。逆風に負けない、生きた神ご自身であることをモーセをはじめ、神の民は知る必要があります。

しかし、「モーセはこのようにイスラエルの人々に語ったが、彼らは落胆と過酷な労働のために、モーセの言うことを聞こうとしなかった」(9)と書かれています。つまり、神を知るべきなのですが、知る力もゆとりも、イスラエルの人々には残っていないのです。

そのイスラエルに対して、神の言葉は懇ろです。「私はあなたがたを私の民とし、私はあなたがたの神となる。あなたがたは、私が主、あなたがたの神であり、あなたがたをエジプトの苦役の下から導き出す者であることを知るようになる」と言われます。イスラエルの民が神を神とするのではなく、神の側から申し出て「私はあなたがたの神となる」と名乗りを上げられるのです。また「知るようになる」も、彼らの知る努力ではなく、自然と知るようになるということです。信仰は神にかかっているのです。

主よ、信じる力、祈る力の限界を感じるとも、あなたが信仰も祈りも生んでくださいます。

7月29日(土) 出エジプト記 第7章

しかし、私はファラオの心をかたくなにする…
(3)

「あなたをファラオに対して神とし」とまで言われ、神の全権はモーセに託されます。ファラオの前で、杖が蛇に変わりますが、同じことをエジプトの魔術師たちが行い、ファラオは頑なな心を変えようとしません。

そこで、十の災いが始まります。まず、ナイル川の水をはじめとする、あらゆる水が血に変わり飲めなくなるという災いです。エジプト文明はナイル川によって栄えました。その川を備えられたのは神です。神の恵みに支えられた自分たちの生活であることを知るべきなのですが、ファラオは心をかたくなにするばかりです。十の災いでは、〈ファラオの心が頑なだ〉と繰り返されます。本章のはじめでは、「私はファラオの心をかたくなにする」(3)とされています。これは、神が機械を操作するようにファラオの心をかたくなにした、というわけではありません。神が、ご自身の揺るぎなく正しい御心をもってファラオに向かい合ったときに、元来そうであった彼の心の頑なさがそこにあらわれ出た、というような意味です。神の御心の強さと正しさのゆえに、この頑なさにも主は勝たれます。頑なさは決して勝利のしるしではないのです。

主よ、御前に現れる自分の心の頑なさに気づくとき、正直にそれを認める柔らかな心を備えさせてください。

7月30日(日) 出エジプト記 第8章

魔術師たちはファラオに、「これは神の指によるものです」と言った。しかし、ファラオの心はかたくなになり…(15)

前章後半から二つ目の災い、「蛙の災い」が言われています。蛙はその繁殖力の強さのゆえに、豊穡の神ヘクトとして崇められました。こんなに多くなるとは災害です。ファラオは、たまたまに荒れ野での祭りを許すから蛙を去らせよと願いますが、喉元過ぎれば…で、心を頑なにします。三つ目は「ぶよの災い」です。ぶよと訳された言葉が実際どの昆虫を指しているのかは、はっきりしません。マラリアなどの伝染病を持ち運んだ蚊のことも含まれるとも考えられています。ファラオはなお心を頑なにします。四つ目は「あぶの災い」です。ここにきて、イスラエルの人々が居住したゴシェンには、あぶの群れは入りませんでした。このようにして、単なる自然の災害ではないことが明らかにされます。神が区別しておられることは、ファラオにもわかったのでしょうか。モーセの言い分を聞くと言いますが、またもや、災いの苦悩が和らぐと元通りの頑なな心に逆戻りします。

15 節では、魔術師たちが「これは神の指によるものだ」と言うのですが、それでもファラオは心を頑なにしたままです。どんなに奇跡を目の当たりにしても、それで神を信じるようになるわけではありません。神の御心を素直に受けとめるほかないのです。

主よ、生きておられるあなたの救いの御心を素直に受けとめさせてください。

7月31日(月) 出エジプト記 第9章

「この度は私が罪を犯した。正しいのは主であり、悪いのは私と私の民だ。(27)

イスラエルを連れ出すためのエジプトへの十の災いのうち、本章では5番目から7番目まで、疫病、腫れ物、雹と進みます。同じような繰り返しに見えますが、5番目は家畜への疫病だったのが、6番目では家畜と人に及ぶものへと進みます。そうして、7番目の雹の災いは激しいもので、ファラオは「この度は私が罪を犯した。正しいのは主であり、悪いのは私と私の民だ。主に祈ってほしい」と言い始めます。ところがそれでもまた、心が頑ななのだと言われます。

「私が罪を犯した。正しいのは主だ」というファラオの言葉で、「彼らは主の言葉を信じ賛美を歌った。しかし彼らはたちまち主の業を忘れ去り」という詩編を思い出します(詩編 106 : 12, 13)。これは荒野の神の民の姿です。頑なな心は人間全体の問題なのです。

どうすれば、本当に心は変わるのでしょうか。旧約聖書には、粘り強く人の心の頑なさを解く神の真剣な取り組みが語られます。それは、神が一方的に、ひたすら熱烈に愛を語るほかありませんでした。ここにイスラエルを通して、その神の愛の取り組みが始まっています。そしてやがてこの愛はエジプトを含むすべての民に及ぶのです。

主よ、未だ頑なな心に対しても、愛をもって向き合ってくださいるとは、なんというあわれみでしょうか。